

に個人からすすみ、小グループの行動の観察、保育者の働きかけに対する反応を觀察記録してゆくなど、まだまだ大切な課題が山と残っていると思います。

また私どもの園は仏教主義の園であり、保育のなかで宗教心を芽はえさせ、身近かな問題として取上げるような考慮をしております。ともすればおとなを考えによる無理な宗教觀、型式的な儀礼のおしつけになってしまふのですが、そのあやまちをおかさないためにも、やはり直接、質問や絵画にによる幼児の神仏觀の調査もつづけております。宗教教育・道徳教育につながるものとして考えなければならない問題ですが、かといって科学的な裏付けのない無理な精神

の束縛であつてはならないと思います。それらの研究内容は機会あるごとに発表しておりますので、御存知の方もありましょう。

以上、当園の研究の経過をたどって書き綴つてみました。八年の月日が経つ間には教諭の中にも結婚による退職など何度か変動がありました。しかし新しく加わった人たちも、いつの間にか先輩の残していくたるもの引きついで、それを育ててゆこうとしております。これが私どもの園風なのでしょうか。たいしたことではなくても、現場から身近かな問題をとらえて研究していくことは、保育の眼を積み重ねてゆく上で

(1)うちの子は早うまれで身体も小さく、どことなく弱々しいから、ちょうどよかつた。

(2)幼児語でハッキリしないし気も小さい方だから少人数の組でよかつた。

その反面、

(1)三年児といつしょのとり扱いをされては困るとハツキリ申し出る父兄もあつた。確かに三年児は、一見してわかるほど身体の格好も動作も、赤ちゃんの域を脱しない状態も見られるので、四才児の父兄からの意見が出るのも、当然と思われた。

杉 山 守 代

三、四才児の混合にあたつて

-----私の組の研究-----

最近、社会一般に三年保育が重要視されているので、私どもの園でも近距離から通園出来る希望者のみ(八名)試験的に扱つてみることにした。ところで三才児のみの組が出来れば理想的であるが、部屋の都合で

では、現在のこの組における発達段階の差はどうだろうか。勿論これは、実際に接して見てわかることがあるが、今後扱う上の予備知識として入園前の調査（昭和三十年一月二十五日調）を参考に検討してみたところを紹介しよう。

(1) 身体検査（略）

運動能力調査（左表）

性別		平均点
男	三才児	4.5
	四才児	6.7
女	三才児	4.7
	四才児	6.4

調査の種類は、1 ちんころ、2 兎とび、3 スキップ（註 1、2、3 の項目を三段階（3、2、1）に評価する）4 積木の構成平均値を見てもわかるように三才児、四才児共男女の差は、ほとんど見られない。また四才児は①②④は出来るが、③のスキップは三人だけしか出来なく、三才児は①のちんころしか出来ない。

性別	年令	平均点
男	三才児	16.5
	四才児	20.0
女	三才児	16.2
	四才児	19.6

註 ①②③④⑤⑥の項目を五段階（5・4・3・2・1）に評価する。

調査の種類	調査の内容
個人的な問題	① 自分の名前 お家で好きな人は？
幼稚園に関する問題	イ……この幼稚園は何という幼稚園？ ② ロ……今日は誰と一緒に来ましたか？ ハ……幼稚園にあがったら一人で来れますか？
玩具	③ (○○さんの)お家にはどんな玩具がありますか？
友達	④ (○○さんは)毎日誰といっしょに遊びますか？
食物	⑤ (○○さんは)おかずの中で何が好きですか？
色と形	⑥ 色(赤・緑・黒) 形(○・△・□)の分別

(2) 言語発表力（中段表）

① 四才児はみょう字と名前をはつきり話す。三才児は名前のみである。それも○ちゃんと言ふか、また家で呼ばれている愛称（雅美をマミ）のままを言う。

② 四才児は考えては答えるが、三才児は質問の中のことば「おかげ」が理解出来ず、「デンデン虫」「おかし」（二名）「パン」、「あめ」などと答える（五名）。

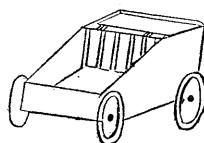
③ 四才児は赤緑黒、型に対し「まる」「三角」「四角」などと名詞で答えるのに對し、三才児は赤を見ると、「あたしの服とおんなじ赤でしう」とか、緑は「はっぱの色で草色」とか、型にしても四角は「お餅」三角は「お山」などと、今まで見たり聞いたり食べたりして経験したものと結びつけて答えている。このように四才児にわかることばでも、三才児には理解出来ないことばもかなり多いので、混合の組を持つ教師は十分にこの点を考慮しなければならないことを感じた。

以上の調査から、傾向や問題をつかんで四月に入園児を迎えた。そして子どもの動きを観察すると同時にいろいろな方法を試み、扱ってきたわけである。

そしてこの経過のうちに「特に考慮した点」は机のグループ構成と遊具についてであった。

生命感を深める試み

松井田鶴子



-----私の園の研究-----

ひよこの乳母車

生れたてのひよこは実にかわいいもの。

早春の町でひよこの声を聞くと、子どもたちはたまらなく欲しくなります。買ってきて、箱に綿を敷いたりこたつに入れたり、一生けんめいに的はれの世話ををするうちには死んでしまう。泣き悲しむ子、困る母親。こんなことは春先にはよく見受けます。

私どもの園では、飼育材料にこの初生雛

を取りあげてみました。普通の育雛箱に四輪をつけ、ひよこの乳母車を作りました。これは子どもたちの手で、らくに移動できることを考えたからです。電球にあたためられた箱に入れると、ひよこの鳴き声はしずまり、やがて小さいあしを伸ばして安眠します。

中びなになると、普通の鶏舎に移してやります。秋から産みはじめる卵は、子どもたちが順番に家へいただいて帰ります。布の袋の中に登山用卵ケースを入れ、それに納めて、肩にかけていきます。翌朝もどつてくる容器の中に、押麦など、にわとりさくらんへのおみやげが時どき入っています。こうした経験を重ねるうちに、電球で育てるのは幼稚園向きでないと感じはじめました。

「ひよこは鳴くものとばかり思っていましたが、寒い寒いと訴えていたんですね。」と死因に思いあたるお母さんもありました。園にも失敗がありました。便が肛門からは